カトリック高松教区報

２０２３年５月１５日（第２１３号）
発行所 カトリック高松司教区 広報委員会
〒760-0074　高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659　FAX 087-833-1484
Email
教区:catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.jp
広報:tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成:yousei@takamatsu.catholic.jp
WEB　http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

マザー・テレサの言葉

はじめのころ、わたしは人を回心させなければならないと思っていました。そうこうするうちに、私の使命は、愛することだと分かりました。そして、愛は望むときに、回心させてくれるのだ、ということがわかったのです。

大陸別シノドスに参加して
ともに歩む教会のため
～自分の存在の意味が必ずある～

髙山 徹 神父

今回、２月23～27日、バンコクで開催された大陸別シノドスに若手教区司祭として参加致しました。昨年、アジア司教協議会で青年司牧についてオンラインのプレゼンをさせていただきました御縁でお声がけをいただきました。貴重な機会を下さった菊地大司教様はじめスタッフの皆様、そして、出張中のご配慮を下さった教区の皆様に、心より感謝申し上げます。

事前準備の時、菊地大司教様のお言葉によって、緊張がほぐれました。それは、「日本の代表ではなく、一信仰者として、自由に話してください」ということでした。当日、バンコクの空港に降り立つと、さっそく数ヶ国のグループの方と出会い、参加させていただいて本当に良かったと思いました。翌日は、朝食後、開催ミサに与りました。19ヶ国からの参加者が一堂に会しました。「今回の集まりは最終的にはアジアとしてのシノドスのまとめの文書を検討するというミッションを有しているが、文書検討委員会に終わってはいけない」という導入のお話がありました。

アジアの大陸別シノドスとは

主たる目的＝ローマに提出するアジアとしてのシノドスの最終文書検討。しかし、文書検討の議論のみではなく、霊的な分かち合いを行う。
主たる参加者＝アジア19か国の司教、司祭、修道者、信徒約90名
主たるプログラム＝基調講演と小グループによる分かち合い、黙想
全体としての成果＝19か国の参加者の多様性、諸国間の緊張など、一括りにアジアといっても非常に多様であることについて、改めて知ることになった。それでも、共に歩むというシノドスのプロセスをこれからも続けることの重要性を、参加者一同が確認した。何よりも出会えたことを喜びながら分かち合った。３月19日付けカトリック新聞で菊地大司教様がいみじくも語られるとおり、10月のローマでの総会でアジアの教会がどのように発言していくのか、その独自性が問われている。

分かち合いの小グループが発表され、所定のテーブルに着きました。私のグループは、インドの司教様、韓国の司教様、フィリピンの神学者の神父様、タイの神父様、インドの女性信徒の方、インドネシアの青年の信徒の方でした。各地で活躍されている方々です。基調講話を受けて分かち合いが始まると、正にそのような背景を感じました。皆さんの分かち合いを必死で書き取り、一つ一つ反復しつつ何とか自分なりにコメントを付していました。「自分のような者がいてもいいのか」とさえ感じました。しかし、その日の午後のセッションの終わりに、気づきがありました―シノドスが共に歩むと言う意味ならば自分の存在の意味が必ずあるということ―。また、インドの司教様が「あなたは若い司祭としてどう考える？」と質問してくださったのを契機に、前向きに分かち合いに参加できました。「一人一人の存在があってこそ、シノドスが行われた」というのが、皆さんの共通した思いでした。

シノドスは、これからも皆で歩み続けてこそ深まると強く感じました。また、今後に残された課題にも気づかされました。例えば「女性」「家庭」「貧しさ」といったテーマを分かち合う中で、実際に当事者の生の声に耳を傾けなければ、抽象的な議論になりがちだと気づきました。それは、小グループ以外の方々との出会いを通しても感じたことです。例えば、信徒数が国全体で５００名のキルギスの使徒座管理者の神父様や、伝統文化の根強いネパールでカトリック学校を経営している神父様のお話を聞いた時に、各国の状況を、そこで懸命に生きている方々の現状を知らされ、自分の置かれている環境がいかに恵まれているかに気づかされると共に、無関心ではいられないと痛感しました。今後もこのシノドスの動きそのものが、必ず何か教会全体のうねりとなるはずですし、大きな希望であると思います。自分自身が、頂いた気づきを糧にして、置かれた場において多くの人々と共に宣教司牧を続けて参りたいと思います。

カトリック中央協議会
シノドス大陸ステージ

はばたき

「ヤングケアラー」をご存じでしょうか。「就学年齢の子供が家族の介護をする」ことです。３月のテレビ報道で、ある19歳の大学生が筋萎縮性側索硬化症（ＡＬＳ）に罹患した母親の介護をしている姿が報じられました。ＡＬＳは全身の筋肉が動かせなくなる神経難病で、政治家になった日本ＡＬＳ協会会長やアイスバケット運動でご存じの方もあるでしょう。ＡＬＳは全身の筋力低下で寝たきりになり、呼吸筋が不全状態になると人工呼吸器を装着し、他者との対話が奪われます。また人工呼吸器装着は、その管理と気道内吸引のため、常時介護者を要します。知能低下はないので、意思疎通ができず、深い孤独感を味わいます。また就業できず、社会参加も阻害されます。家族への遠慮から、呼吸が苦しくなっても人工呼吸器をつけず死を選ぶ方も多いのです。人工呼吸器装着は欧米では大変少なく、日本では割合多い現状です。

先に報道された母一人子一人の19歳の青年は母親の介護のために大学は通信制を選び、ケアの毎日です。そしていよいよ母親が人工呼吸器をつけたいと発言しました。人工呼吸器を装着した母親の介護を、将来のある青年の小さな胸のうちで判断するには苦しすぎる現実だと感じました。私たちはかつてヤングケアラーで学校を休み、奉仕しましたが、現代の小さな家族には重荷です。多くの人がそこにキリストを見てほしいものです。

地区・ブロックの話題

～愛媛地区～

南予にて　二つの教会での宣教司牧

名誉司教　諏訪榮治郎

昨年秋、11年間の司教職を引退し今年1月1日付けで愛媛地区南予ブロック（宇和島・八幡浜教会）に赴任いたしました。これまでチームで働いていた感覚から、一人での小教区担当は十分すぎるほどの司祭館設備でありながら、心もとない感覚のスタートでした。2か月を経た今の状況を報告させていただきます。

早朝ミサとともにささげる「教会の祈り」の詩編の言葉はこれまで以上に身に沁みます。朝食のあと幼稚園チャプレンとして「おはようございます！」かわいい園児と保護者の方々の登園を迎えます。T字型の交差点にある教会ゆえに、お母さん方の車の交通整理をすることも大切かと思っています。朝の太陽の光を受けながら、教会の前を通る通勤や散歩の方々との朝の挨拶も楽しいものです。由緒あるお寺の点在する宇和島は懐かしい昭和のたたずまいを色濃く残し、いろいろ散策しております。

主日は八幡浜教会へのミサのため余裕をもって出かけます。途中の「卯之町」でベトナム青年を車に乗せ教会に向かいます。八幡浜教会は可愛い小さな教会ですが、祈りの場として吸い込まれます。ただ「ゆるしの秘跡」の場所が取れないため、ミサが始まるまで信者さんの白いバンが「告解場」となり、ともに祈る場となっています。

このミサが終わると、直ちにベトナムの青年を車に乗せ宇和島教会へと向かいます。車内では片言の日本語ですが、若者や楽しい場所が少ない地方での寂しさが話題になっています。せめて教会が彼らの交わりの場となればいいのですが、時間がとれない・・二つの教会の交流をいかに見い出していくか、これも当面の課題の一つです。かつかつの時間に宇和島に戻りミサが始まります。今まで以上にミサの中で祈りを託された方々のことを思いだします。

またある受刑者との文通が始まりました。落ち着いたこの南予の場所で言葉を選びながら、主の言葉を文面で分かち合っています。教会がミサだけの場所ではなく、以前のお寺のように人々の生活に密着した開かれた場、互いを支えあう交わりの場、み言葉の食卓としての養成の場・・であればとの思いが背中をもっと押してくださるようにと願っています。

四国の教会が同じような課題を抱きながらこつこつと毎日を歩んでいることを思うとき、遅ればせながら今まで本当にありがとうございました、これからもよろしくお願いいたしますと、引退し改めて宣教司牧に当たる立場で申し上げたいと思います。

諏訪名誉司教の近況

2022年9月28日に高松司教区教区長を退任された使徒ヨハネ諏訪榮治郎名誉司教は、2022年1月1日から、カトリック宇和島教会・八幡浜教会担当となられました。宇和島教会に居住され、日曜日は早朝から自家用車で八幡浜教会に向けて高速道路を走り、9時30分のミサを司式、11時30分から宇和島教会に戻り、ミサを司式されます。折しも11月17日から典礼式文の変更や四旬節、復活祭と典礼の行事が続きました。

宇和島教会では、2022年開所のヨハネファクトリー（就労継続支援B型事業所）を訪問され、ミサを行いました（写真①）。司教様は、ヨハネファクトリーでのミサ後、その母体となるカサヨハネに立ち寄られ、子供たちと遊んで下さり、ブランコも楽しまれました（写真②）。カサヨハネは、2011年に放課後等デイサービス、児童発達支援事業を始め、キリスト教の愛の精神に基づき、医療法人岡沢クリニック（小児科＝岡澤朋子院長）を母体として設立されました。この障害児・者のデイサービスでは、学校・家庭まで送迎し、楽しく遊び、学び、仲間・友達と仲良く過ごすことを援助し、指導することを目的としています。

また、2020年5月に教区長として再建小聖堂を祝福された八幡浜教会は、座席20名の小さな聖堂です。4月9日の復活祭には、外国人14名を含め21名がミサに参加しました（写真③）。小さな聖堂ですから、司教様の大聖堂同様の熱のこもったお話は、傍の道路を歩く人にも聞こえるほどです。

②カサヨハネでブランコに乗る諏訪名誉司教

③八幡浜教会での復活祭ミサ

①ヨハネファクトリーでのミサ

～西讃ブロック～

聖ヨセフの祝日　ベトナム人たちの集い

太田　修

3月12日（日）14時～16時丸亀教会で聖ヨセフの祝日を祝うミサが、ベトナム人の若者たち80人程が参加して、今治教会から来られた郷神父様（日本に帰化された名前）の司式で盛大に行われました。

祭壇には聖ヨセフの大きなパネルが掲げられ、この日のために作られた揃いのTシャツを着て、ごミサに与っていました。20歳代の若さ溢れる若者たちのエネルギーに圧倒されながら、そばで参加していましたが、伊予三島、観音寺、丸亀、坂出、高松地区から参加したこの若者は、何か行事があれば、一致団結して事前の準備をし、当日の役割分担もきちんと決めて盛大にミサを執り行っている姿は、素晴らしいものがありました。

ごミサの後もみんなで手際よく掃除、片付けをして我々残された丸亀教会の信者たちに挨拶をして帰って行く姿は、次を担う若者たちに託した姿と重なりました。

（次ページ下段に写真）

国際色豊かな丸亀教会

丸亀教会では、少なくなりつつある日本人信者に交じって、最近ではベトナム人の若者も増え、フィリピン人、ペルー人、イタリア人、スペイン人たちが聖堂の半分以上を占めています。聖書朗読の当番に当たった人は母国語で聖書を読み、共同祈願もそれぞれの母国語で祈っています。また、ごミサの中での聖歌もタガログ語やスペイン語や英語の歌などを取り入れて、国際色豊かな、誰もが参加しやすいごミサを目指して頑張っています。

丸亀教会　二人の子供が受洗

4月9日、丸亀教会では復活の主日に合わせて復活祭のミサが荘厳の内に行われ、その中で、アントニオ神父様と一緒に洗礼の準備をしてこられた二人の洗礼式がありました。

久しぶりに聖堂一杯の信者で埋まり、盛大な復活祭の1日でした。

ペルー人3世の安村箱崎レオポルド・オクタヴィオさんの長女で安村ミカエラ怜依ちゃん0歳です。

両親やレオポルドさんの兄弟、祖母、奥さんのご両親たちの見守る中での洗礼式で、式中もずっとすやすやと眠っていた怜依ちゃんは、神父様から洗礼の水を頭から掛けられても、びっくりすることなく最後まで眠っていた肝っ玉の据わった赤ちゃんでした（笑）。

小学校5年生のミキコちゃんは、フィリピン人のご両親のもとで育ったとても素直なおとなしい性格の持ち主のバスニリロ・ミキコアンドレちゃんです。

毎週ごミサに与り、日曜学校で真面目に勉強をし、晴れてこの日は洗礼と初聖体を迎えました。ご両親はもとより、代父代母や友人たちから、沢山の祝福を受けました。

～東讃ブロック～
聖体奉仕者の任命を受けて

番町教会　ヨゼフ田中賢二

４月９日、復活ミサの最後に森神父様より『聖体授与の臨時の奉仕者』の任命を受けました。

森神父様には聖体奉仕者になるための勉強や講習会の指導に多くの時間を費やしていただき、本当にありがとうございました。

おかげ様で番町教会にも３名の聖体奉仕者が誕生いたしました。

ところで私が聖体奉仕者の勉強をすることになったきっかけは、使命感などといった崇高なものではなく、積極的に手を挙げたわけでもありません。

昨年、聖書勉強会の場で聖体奉仕者の養成の話があり、その後少しずつ話が進み、評議会で必要かつ早急な事案となりました。復活祭までに講習の修了を目指して一期生（？）として八尾議長、河合典礼部長のお二人が名乗りを挙げ、３人体制が必要とのことで半ば強引に私に白羽の矢が当たった様なわけです。

しかし、今でもそうですが自分が聖体奉仕者にふさわしいとは思えません。

ご存知の方もおられると思いますが、私は罪深い人間であり、長い間教会から遠ざかっていました。年に一度のクリスマスミサ、復活ミサに時々あずかる事はあっても、聖体拝領を受けることも無く、ミサが終われば誰とも話さず、すぐに帰る有様でした。

幼児洗礼の私は信者の義務というものが身に染みているせいか、「年に一度はミサにあずかるべし、ミサにあずからざるとも聖体訪問をすべし」というところでしょうか。

今から思えば義務を果たすというよりも、義務を果たさずにいて受けるかもしれない罰を恐れていたのかもしれません。しかし私たちが信じる神は決してそんな存在ではなくて、寛容で慈愛に満ちた方だというのに、当時の私は本当に愚かでした。

ところが、ある日のミサで今まで典礼文の一句として聞き流していた「主の食卓に招かれた者は幸いである」という言葉が唐突にリアリティをもって響いたのです。これは義務じゃない、ここにいるのは幸せなことなんだ、そう実感した奇跡的な感覚でした。

それからは教会の行事にも積極的に参加できる様になり、今回の聖体奉仕者の受講も、なりゆきとはいえ、積極的に取り組んできました。それでも私が聖体奉仕をする事で不愉快に思う方もいるかもしれない、誰かのつまずきになりはしないか、との思いもあり神父様にも相談しました。神父様は「そういう貴方だからこそ受講を続けてください。貴方のためでもあります。」と背中を押してくださいました。

聖体奉仕者は特別な存在ではありません。侍者やオルガン奏者と同じく信徒の役割の一つですし、任命には期限があります。

信徒の皆様がいつかは担う役割の先陣を、精一杯努めていきたいと今は思っています。

4月30日、初めての集会祭儀にて
田中さん（上）河合さん（下）　この日は二人で司式しました。

～東讃ブロックの集会祭儀～

東讃ブロックでは、森神父、髙山神父のお二人が４つの教会を担当されています。狭い東讃地域とは言え、主日にそれぞれの教会でミサをしていただくことには限界がありますので、各教会で毎月１回は集会祭儀が行われています。信徒のチームが助祭の司式により集会祭儀を行っていますが、神父の都合や小教区での行事などにより、月ごとの司式予定は変動することがあります。（毎月の予定は、桜町教会のホームページとフェイスブックに掲載しています。）

高知　小教区合併
安芸教会が中島町教会と合併
赤岡教会が江ノ口教会と合併

２０２３年３月22日付け教区管理者通知で周知されたとおり、高知県で２つの小教区合併がありました。

◇　◇　◇

（教区管理者通知より）

２０２３年１月24日に開かれたカトリック高松司教区責任役員会での承認に基づき、２０２３年３月31日をもって、カトリック安芸教会及びカトリック赤岡教会は、それぞれ、安芸教会はカトリック中島町教会と、赤岡教会はカトリック江ノ口教会と合併することになりました。

これまでの安芸教会及び赤岡教会の信徒台帳ほか小教区書類は、会計も含め、すべて、それぞれ中島町教会及び江ノ口教会にて保存していただきますが、それぞれの聖堂はカトリック安芸礼拝所およびカトリック赤岡礼拝所として残り、聖堂以外の建物については、今後、利用法を工夫していきたいと考えています。

利用や管理について、アイデアがあれば御提案いただけると幸いです。

皆さま方には、何かとご不便をおかけすることと思いますが、どうぞよろしくお願いします。

新型コロナウイルス　新しい感染対策
コロナ前の教会活動への回復を目指して

３月８日、新型コロナウイルス感染対策についての教区の新指針が発表されました。

すでに、従来の対策よりも緩和された新指針に基づいて主日のミサ、勉強会などが行われていると思いますが、教区報でも指針の概要をお知らせします。

これまで高松教区では、地域の行政の呼びかけに全面的に協力してきましたが、教会活動の自粛によるマイナス面は見過ごすことができなくなっています。そこで、守るべき基本的感染対策は厳守した上で、教会活動について、できるところから、コロナ流行以前の状態に回復させてゆくこととされました。政府の方針などを考慮した「教区としての指針」は次のとおりです。

◇　◇　◇

（教区管理者通知より）

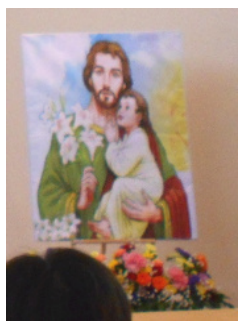
教区としては、聖週間の典礼からこれまでのコロナ対策を緩和しますが、コロナは終息したわけではなく教会には高齢者も多いので、発熱や体調不良がある場合等は教会に来るのを控えてください。また、感染状況の悪化や、国や自治体から新たな要請が出た場合には、それに従った対策をとるようにして下さい。

１　教会には高齢者や医療関係者等も多く、聖堂内では基本的にマスク着用でお願いします。手指消毒については、聖堂に入る時に一度アルコールなどで消毒すれば充分で、聖体拝領時の再消毒は不要です。むしろ、十分な換気をお願いします。

２　ミサでの司式者と全信徒の交唱や歌も可能です。ただ、特に全員で歌う場合には換気状況や混み具合（密）に配慮した上で、臨機応変に対策を工夫してください。

３　ミサへの参加人数制限はありませんが、通常の状態を超えるような密は避けて下さい。換気が難しかったリ、思いがけなく人が多く集まった場合などには、小声で歌うとか全員で歌うことを避けるなどの対策をお願いします。

４　勉強会や食事会などの教会活動もできるだけ再開して下さい。しかし、病人、高齢者訪問については、病院、施設、家族の了解を得てから行ってください。



丸亀教会での聖ヨセフの祝日の集いにて（前ページに記事）
郷神父・聖ヨセフのパネル・おそろいのシャツ

大島教会の片付け

桜町教会

高松市沖のハンセン病療養所「大島青松園」がある大島に、カトリック教会があります。１９４８年ごろから入所者が受洗したり、カトリック信者の職員が勤務したりしていたところ、島に聖堂建設の気運が高まり、１９５４年に献堂され、祈りの場として大切な役目を担ってきた教会です。１９７４年頃からは青年のワークキャンプが行われるようになり、桜町教会信徒も定期的に訪問していました。しかし、昨秋、最後の信者だった大野さんが帰天され、現在、島内に信者は一人もいません。

昨年５月大島青松園から、今後の建物保存等を見据えた整備点検の利便性・効率向上のため、必要最低限のものを残して備品の整頓をして欲しいとの依頼があり、教会の片付けをすることになりました。６月に森神父と信徒二人が現場を確認し、大島青松園との協議を経て、11月12日、12月10日の２回、番町教会からの応援もいただいて片付けを行いました。

相当量の備品や信者の遺品などが雑然と放置された状態となっていて、大変な作業でしたが、ゴミ処理についての大島青松園の協力もあり、聖堂内はかなり整理できました。だいぶ間が空いてしまいましたが、もう１日司祭室等の片付けを行う予定です。

全国のハンセン病療養所で、施設の保存などについて検討が始まっているそうですが、大島でどうするかはこれから検討されるとのことです。建物の老朽化も相当進んでいるため、維持管理の費用なども勘案して決まっていくものと思います。

聖堂外観とゴミ分別後の聖堂内

◇教区スケジュール◇

5月
- 3日（水）憲法記念日
- 4日（木）みどりの日
- 5日（金）こどもの日
- 7日（日）復活節第5主日
- 9日（火）司牧者懇談会・司祭評議会
- 14日（日）復活節第6主日　世界広報の日
- 20日（金）田中英吉司教　命日
- 21日（日）主の昇天
- 28日（火）聖霊降臨の主日

6月
- 4日（日）三位一体の主日
- 11日（日）キリストの聖体
- 16日（金）イエスのみ心
- 18日（日）年間第11主日
- 24日（土）洗礼者聖ヨハネの誕生
- 25日（日）年間第12主日　聖ペトロ使徒座への献金

教区報バックナンバーのご紹介

高松教区のホームページには、フルカラーの教区報を掲載しています。
右のＱＲコードからご覧下さい。

追悼

スペイン外国宣教会から派遣され、長年にわたり西讃地区で活躍された二人の神父様が帰天されました。

フスト・セグラ神父様永眠される

第３代（１９７０～１９７７）第５代（１９７９～１９８５）と丸亀教会の主任司祭を務められたフスト・セグラ神父様が、２０２３年３月５日帰天されました。いつも笑顔で優しく接して下さり、みんなから愛されておられた神父様でした。

ここにセグラ神父様の軌跡をご紹介したいと思います。

１９６３年スペイン外国宣教会の司祭として初来日し、兵庫県で宣教活動ののち１９６６年に高松司教区に異動され、１９６６～１９８９年の間、丸亀聖母幼稚園の園長も務め沢山の子供たちを育てられました。

１９８５年夏に、神父様が休暇でスペインに帰国された時、丸亀聖母幼稚園の卒園生である青少年９名を帯同され、丸亀市長や教育長からの親書を携行し、サンセバスティアン市長に手渡されました。この訪問がきっかけとなり、丸亀市とサンセバスティアン市は１９９０年に姉妹都市提携に調印し、その後、約２６０名の児童が交流して、双方の学生、児童たちがさまざまな形で交流を深めています。１９９０年に丸亀市との姉妹都市提携の功労者として、サンセバスティアン市から「タンボロ・デ・オロ」という勲章を受章されました。

１９８９年に大阪司教区に異動され、大阪、兵庫を中心に精力的に活動されていました。沢山の執筆活動もされていました。途中、何度も倒れられ入院されましたが奇跡的に復活し、２０２０年から２０２３年の間、仁豊野ヴィラにて療養をされ、その中でもいろいろと活動されていたそうです。そして、２０２３年３月５日の朝、神様の元へ帰天されました。

「丸亀に骨を埋める」と生前から言われていたセグラ神父様の為、２０２３年３月15日18時30分より、丸亀教会で追悼式並びに納骨式が執り行われました。古くから知る教会関係の信者は勿論の事、丸亀市役所の職員や当時サンセバスティアンに国際交流をした児童（現在は皆さん立派な大人になられている）やご父兄の方々も沢山お別れに参列されました。

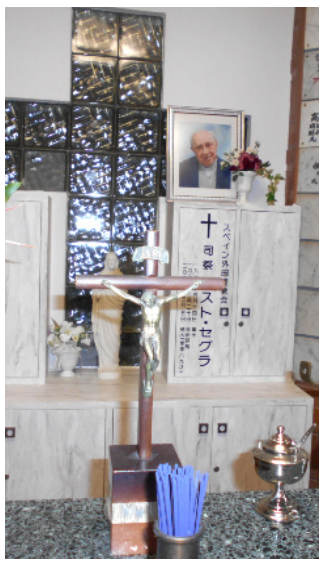
献香の後、松永恭二丸亀市長より弔辞が読まれ、厳かな気持ちで拝聴しました。

式典の後納骨式が執り行われ、セグラ神父様のご遺骨は、新しく出来た丸亀教会の納骨櫃に納骨されました。

１９３３年５月誕生、１９５８年７月司祭叙階、２０２３年３月帰天（享年89歳）。

安らかにお眠りください。

† 太田　修



右側上下＝追悼式にて、左側＝納骨堂にて

マンソ神父様を偲んで

去る３月31日スペインで天に召されたマンソ神父様を偲んで、観音寺教会において４月21日午後６時より葬儀ミサを行いました。イスマエル神父様、ホルヘ神父様の司式のもと、卒園生・ボーイスカウト関係者・坂出教会の方々・地元信者及び一般の旧知の方々・職員など五十余人の参加者で祈りを捧げました。

顧みて、１９５３年１月オンダラ神父様と共に高松に足を踏み入れて以来、西讃地区の教会・幼稚園を設立し、布教に邁進してこられ、殊に観音寺教会においては、44年間の長きに亘り、幼稚園長として又司祭として活躍され、病に倒れた後もご自分の園長給からスペイン外国宣教会に積立られた貯えを教会の改築の為に支払ってくださいました。本当に有難うございました。感謝の念で一杯でございます。最後まで日本のこと、観音寺でのことを思っていたと聞き及んでおります。

数々の足跡を残して行かれたマンソ神父様、どうぞ天国で安らかに憩われますように、そして至らない私たちを見守ってくださいますようにお願いいたします。

観音寺教会　山口知恵子

葬儀ミサにて